

親鸞仏教センター主任研究員定例講座

『歎異抄』思想の解明 第Ⅱ期・第3回(通算第10回)

第一章——先師口伝の大道(3)

加来 雄之

第一章

蓮如本	(安良岡康作『全講読』、ただし〔〕記号と傍線は加来が補った。)
<p>一 弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。</p> <p>弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらはれず、たゞ信心を要〈えう〉とすとしるべし。</p> <p>そのゆへは、罪悪深重・煩惱熾盛〈至常〉の衆生をたすけんかための願にまします。</p> <p>しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要〈えう〉にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。</p>	<p>一 阿弥陀仏の〔お立てになった〕誓願の、人間の思量を超えた、絶対的な力にお助けをこうむって、「浄土に往って生れることを果たすのだ」と信じて、〔口に「南無阿弥陀仏」という〕念仏を申し上げようという<u>思いが生ずる時</u>、即座に、一切の衆生を受け入れて救い取り、お捨てにならないというご利益に人間をお参加させになるのである。</p> <p>この阿弥陀仏の根本の誓願におかせられては、老人と若い者、善い人と悪い人とおえらびにならない。〔ひとにとっては、〕ただ一つ、〔その本願への〕信心だけが必要なのだとよく心得なくてはならない。</p> <p>そのわけは、犯す罪悪が深くして重く、煩惱の勢いが非常に盛んな、一切の生き物をお助けになろうとするための願であらせられるからである。</p> <p>従って、弥陀の本願を<u>信じようとするに当っては</u>、ほかの善い行いも必要ではないのだ。念仏より優越する善い行いはないのであるから。また、悪い行いをも恐れてはならないのだ。〔阿弥陀仏の〕本願を妨害するほどの悪い行いはないのであるから。……</p>

I 前回までの振り返りと第一段の補足

・『歎異抄』は「先師口伝の真信に異なることを歎」く書である。「歎異」のために、まずその基準となる「先師口伝の真信」を実現する大道を顕わすのが第一章である。この第一章の大道の受けとめが以下に展開する師訓篇と異義篇と述懐篇を理解するための基礎となる。

唯円は、親鸞聖人が源空聖人を通して受けとめた「先師(源空聖人)口伝の真信」の大道を第一章に記されなければならなかった。

【第一段補足】

一、「こころのおこるときすなはち」

・この「こころ（心）」は前の「信じて」と響きあって信心という語を形成する。弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて…おこるとき」までは「如来よりたまわりたる信心」を語るものであろう。

・「ときすなはち」は、「時、即ち」の意。「そのときただちに、即坐に、すぐに」の意味。「信の一念」のこと。

それ真実信樂を案ずるに、信樂に一念あり。「一念」は、これ信樂開發の時剋の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰すなり。

(信卷『聖典』139頁)

この「ときすなはち」は、時計の計量できる時間ではなく、自覚の時間をあらわす。安田理深の「時熟」（『親鸞教学』第九号、一九六六年、『歎異抄』特集号を参照。『安田理深選集』第一卷所収）を参考に。

一、「摂取不捨の利益」

・「摂取不捨」は『観無量寿経』の真身観に出る表現であり、源空・親鸞の他力の浄土教においてすくいを表現する重要な概念である。とくに親鸞は「摂取不捨」を浄土宗における真実のすくいを表現する概念として重視した。

・『浄土和讃』弥陀経意・「摂取して」の左訓「せふはものゝにくるをおわえとるなり」（『定本』II・五一頁）また、

・「摂取不捨の利益」の具体相

「摂取不捨」ともいうすは、「摂」は、おさめるといふ、「護」は、ところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらわず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは、異学異見のともがらにやぶられず、別解別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、悪鬼悪神なやますことなしとなり。「不捨」といふは、信心のひとを、智慧光仏の御こころにおさめまもりて、心光のうちに、ときとしてすてたまわずと、しらしめんともいうす御のりなり。」

(『一念多念文意』『聖典』538頁)

一、「にあづけしめたまふなり」

「預（あづ）く」は、他動詞で、加わらせる、参加させる。「しめはまふ」は、使役の助動詞が尊敬の意に転じ、おなじく尊敬の助動詞「たまふ」と結びついて最高の尊敬をあらわし、文末の「なり」は断定・確説の意を表す助動詞で、のである、のだ、の意。（安良岡四九頁）「物や人の管理を一時他の人にゆだねる」こと。（岩波古語辞典）また参与させる、参加させる意とされる。

この「攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」には、親鸞がすくいの実感が、「攝取不捨」という仏の功德と「あづけしめたまふ」という私たちの利益との関係として厳密にあらわされている。

安田理深はこの「あづけしめたまふ」という表現に原始經典の預流という意味を見いだしている。

一、第一章第一段の厳密な表現。「弥陀にすくわれて往生すると信じて念仏すれば攝取不捨される」という理解との異なり。

一、第二段への展開。第一段の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、……信じて」の「信じて」の内実を展開するのが、「弥陀の本願には」から始まる第二段・「本願を信ぜんには」から始まる第三段であろう。

【参考】

「言護念増上縁者」というのは、まことの心をえたる人をこのよにてつねにまもりたまうともうすことばなり。……「摂護不捨」というのは、おさめまもりてすてずとなり。

「総不論照摂 余雑業行者」というのは、総はすべてという、みなという。雑行雑修の人をばすべてみなてらしおさめまもりたまわずとなり。てらしまもりたまわずともうすは、攝取不捨の利益にあずからずとなり。本願の行者にあらざるゆえなりとしるべし。しかれば摂護不捨と積したまわず。「現生護念増上縁」というのは、このよにてまことの信ある人をまもりたまうともうすみことなり。増上縁はすぐれたる強縁となり。」（『聖典』325頁）

「総不論照摂余雑業行者」というのは、「総」は、みなというなり。「不論」は、いわずというところなり。「照摂」は、てらしおさむと。「余の雑業」というのは、もろもろの善業なり。雑行を修し、雑修をこのむものをば、すべてみな、てらしおさむといわずと、まもらずとのたまえるなり。これすなわち、本願の行者にあらざるゆえに、攝取の利益にあずからざるなりとしるべしとなり。このよにてまもらずとなり。「此亦是現生護念」というのは、このよにてまもらせたまうとなり。本願業力は信心のひとの強縁なるがゆえに、増上縁ともうすなり。」（『聖典』538頁）

「当知此人」というのは、信心のひとをあらわす御のりなり。「為得大利」というのは、無上涅槃をさとりゆえに、「則是具足無上功德」とものたまえるなり。「則」というのは、すなわちという、のりともうすことばなり。如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大な利益をうるなり。自然に、さまざまのさとりを、すなわちひらく法則なり。法則というは、はじめて行者のはからいにあらず。もとより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則とはいうなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを、法則ともうすなり。」（『一念多念文意』『聖典』539頁）

=====

II 第二段

【本文】

弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらはれず、ただ信心を要〈エウ〉とすとするべし。そのゆへは、罪惡深重・煩惱熾盛〈至常〉の衆生をたすけんかための願にまします。

【主な校訂】

願に——願にて（永正本）

【安良岡訳（〔〕は本文にはないが安良岡が補ったと思われる箇所）】

〔この〕阿弥陀仏の根本の誓願におかせられては、老人と若い者、善い人と悪い人とおえらびにならない。〔ひとにとっては、〕ただ一つ、〔その本願への〕信心だけが必要なのだとよく心得なくてはならない。そのわけは、犯す罪惡が深くして重く、煩惱の勢いが非常に盛んな、一切の生き物をお助けになろうとするための願であらせられるからである。

【科文】

・了祥『聞記』

第二段 「弥陀の本願」 述信心本願（→信心の仏道の根拠としての本願の精神）
初、述入信要不……「弥陀の本願」
二、引機信文証……「そのゆえは」

・曾我『聴記』

第二段 「弥陀の本願」 信心為本を標す
第三段 「そのゆえは」 悪人正機の信相を顕す

【第一段からの展開】

第一段では、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて……と信じ」る「先師口伝の真信」を実現する大道、もしくは「易行の一門」が示された。

第二段は、その大道ではただ信心を要とすることが弥陀の本願として確かめられる。

【第二段の検討】

一、「弥陀の本願には」

ここでいう「弥陀の本願」とはなにか。

┌因本の願 四十八願
本願└
└根本の願 第十八願

第一段には「弥陀の誓願」とあったが、ここでは「弥陀の本願」と限定し、阿弥陀如来の誓願の根本意趣をあらわす第十八・至心信樂の願だけを「弥陀の本願」として示している。そのことは「ただ信心を要とす」という表現からも明らかである。

この心すなわちこれ念仏往生の願より出でたり。この大願を選択本願と名づく。また本願三心の願と名づく、また至心信樂の願と名づく。また往相信心の願と名づくべきなり。……

至心信樂の本願の文、

『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれざれば正覺を取らじと。ただ五逆と誹謗正法を除く、と。已上

(『教行信証』信卷、『聖典』212頁)

一、「老少善惡のひとをえらばれず」

・知識や道德などの人間の諸属性によって、摂取不捨の利益にあずかるのではない、弥陀の本願においてはただ信心、目覚めのみが人間に要求されている。

・宗教的価値をはかるのに通常用いられる概念や基準を代表させ、それが本願にとっては何の関係もないといおうとするとき、さまざまな価値の中からは「老少」と「善惡」が選ばれたのか。

「老少」とは知的関心による差別か。

「善惡」とは倫理的関心による差別である。『歎異抄』を貫く重要な関心。

おおよそ大信海を案ずれば、貴賤・縑素を簡ばず、男女・老少を謂わず、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず、行にあらず・善にあらず、頓にあらず・漸にあらず、定にあらず・散にあらず、正観にあらず・邪観にあらず、有念にあらず・無念にあらず、尋常にあらず・臨終にあらず、多念にあらず・一念にあらず、ただこれ不可思議・不可説・不可称の信樂なり。たとえば阿伽陀薬のよく一切の毒を滅するがごとし。如来誓願の薬は、よく智愚の毒を滅するなり。

(『聖典』236頁)

一、「ただ信心を要とすとしるべし」

・「ただ信心を要とす」＝ただ<如来よりたまわりの信心>を要とす

・「要」①平声「こし、もとめる。」②去声「かなめ、たいせつなところ」。

宗教的生において信が必要だということはおそらくあらゆる宗教が主張する。しかし「ただ信心を要とす」という主張は、そのような意味ではなく、それ以外のあらゆる条件を要求しないということであり、如来の限りない智慧による衆生観のなかにあるという確信にもとづくのである。しかも、それが決して観念的もしくは抽象的にならないのは、次に示される

如来の願にもとづく深い人間の見方が息づいているからである。

この表現は、「信心為本」という表現とく区別しなくてはいけない、決して念仏よりも信心が本ということではない。「本」と「要」

念仏為本……念仏往生の願

信心為要……至心信樂の願

・また、ここに「知るべし」と呼びかけ、確認する表現をとることは、私たちが弥陀の本願を語りながら、「老少善悪の人をえら」ぶという関心（わがはからい）が、いつのまにか、避けようもなく、意識下に忍び込み、宗教心が定散心・罪福心に取り込まれるという痛ましい現実があるからであろう。このような如来を疑うという現実を見極めることない教えを知らなければ、私たちはその罪を自覚することができず、その罪のなかに取り込まれてしまうのである。ここにその信仰の罪をどこまでも求道の課題とした教え、信仰批判の教えが与えられている意味がある。

一、「そのゆへは罪惡深重煩惱^{熾盛}至常の衆生をたすけんがための願にまします」

・「そのゆへは」において「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさ」が機の深信として探究される。

- ・「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」は、阿弥陀如来の本願に見いだされる衆生の実相である。
- ・機の深信

「智昇師の『集諸經礼懺儀』の下巻に云わく、深心は、すなわちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して火宅を出でずと信知す。いま弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、一念に至るに及ぶまで疑心あることなし。かるがゆえに深心と名づく、と。已上」

(行卷『聖典』191頁)

- ・「至常」から「熾盛」へ。「至常」を見せ消ちで「熾盛」に訂正。
- ・衆生の迷いのあり方が二方面から押さえられている。

「衆生をたすけんかための願」については、『大無量寿經』に法藏比丘の発心として「我世において速やかに正覺を成らしめて、もろもろの生死勤苦の本を抜かしめん」（『大無量寿經』『聖典』13頁）とある。

また総序では、浄土教の対機が「これすなわち権化の仁、齊しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。」（『教行信証』総序『聖典』149頁）と示されている。

唯識説では、衆生の迷いを二の重障（煩惱障・所知障）で押さえる。

「罪惡深重」とは、生死、逆謗闡提 ……所知障
「煩惱熾盛」とは、勤苦、苦惱衆生 ……煩惱障

「罪惡」とは本来性に背反することであり、安田理深によればもっとも人間の深い罪は自己に背くことである。

「煩惱」を代表するのは三毒とはむさぼり、いかり、おろかさである。
如来の心において「罪惡」は「深重」であり、「煩惱」は「熾盛」と表現される。